



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ナゴルノ・カラバフ後のアゼルバイジャンの顕彰：戦利品公園を見学して
Author(s)	岩倉, 洸; IWAKURA, Ko
Citation	日本中央アジア学会報, 19, 54-63
Issue Date	2023-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.19.54
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94168
Type	journal article
File Information	JB19_013iwakura.pdf



ナゴルノ・カラバフ後のアゼルバイジャンの顕彰 —— 戦利品公園を見学して ——

岩倉 洸

はじめに

2020年9月に始まった第2次ナゴルノ・カラバフ⁽¹⁾紛争(以後、第2次紛争と呼称)は、アゼルバイジャンの勝利によって幕を閉じた。その後、アゼルバイジャンでは様々な戦勝事業が進められた。その一環として、紛争中にアルメニア⁽²⁾から獲得した軍事品を展示する公園博物館「戦利品公園 (Hərbi Qənimətlər Parkı)」が2021年4月に首都バクーにて開園した。戦利品公園は、展示内容が人道・平和・寛容に反するとして、アルメニアや欧米諸国から批判を受け、国際的に注目を受けてきた。しかし、日本では2021年4月の一部の報道や、2023年1月の朝日新聞論説委員、国末憲人氏のツイッター投稿などで言及された[国末2023]だけで、その存在が広く認知されていないように思われる。

そこで、筆者は2022年9月にアゼルバイジャンで調査を行った際に、戦利品公園を訪問した。その展示と様子についてここで紹介したい。

戦利品公園の沿革と概要

戦利品公園の構想が初めて明らかになったのは、第2次紛争の停戦協定が結ばれた翌日、2020年11月11日にイルハム・アリエフ大統領が鹵獲品の展示計画があると声明を出した時である。さらに、2020年12月3日に「バクーの祖国戦争記念複合施設と勝利博物館の設立に関する大統領令」が公布され、事業が本格的に進行した。その後、国防省とバクー市の主導で建設が進み、2021年4月12日に大統領臨席の下、公園が開園した。これに先立つ12月10日には、鹵獲品の一部が戦勝パレードで使用された。

大統領令の前文によれば、戦利品公園は「紛争におけるアゼルバイジャン人の英雄的行為

(1) 本稿ではナゴルノ・カラバフの地名に関して、アゼルバイジャン語で記述された展示の引用にのみカラバグと表記し、それ以外はナゴルノ・カラバフで統一する。

(2) 第2次紛争では未承認国家であるナゴルノ・カラバフ共和国の軍も参戦しているが、本稿では便宜上アルメニア、またはアルメニア軍と統一する。

と勝ち取った歴史的勝利を示し、殉教者の記憶を永続させる」[APRIS 2020] ために設置された施設である。このことから、戦利品公園とは、戦勝を誇ることで愛国や祖国防衛を訴えつつ、紛争に関わった人々の追悼・顕彰を目的とした施設であるといえよう。このような目的を果たすために、戦利品公園は主に3つの展示を行っている。具体的には、第1に鹵獲した軍事車両・兵器・ナンバープレートなどの野外展示、第2にアルメニア軍の基地と塹壕を合わせた防御陣の再現、第3に紛争の歴史を説明する掲示・映像である。なお、アルメニアや欧米諸国による批判の影響もあってか、2021年10月にはアルメニア軍人のヘルメットとマネキン展示が修理を理由に撤去された[Avetisyan 2021]。しかし、それ以外の展示物は開園当初のままである。

戦利品公園までの道筋と正門

戦利品公園はバクー市内に位置しており、ハイダル・アリエフ国際空港からのリムジンバスの終点地下鉄「5月28日(28 May)」駅周辺から約5km東にある。公共交通機関を利用する場合、5月28日駅の反対側から市内バスの21番または175番に乗り、約10分で「ホワイトシティ大通り(Ağ Şəhər Bulvarı)」バス停に到着する。そこから徒歩で700m南東の方角に回り込むと辿り着く。周辺は2011年頃から政府主導で都市開発が進んでいるが、バス停から公園の入口までの道路と海岸公園以外は未開発で、歩行者も見当たらず殺風景な光景が広がるばかりであった。

駐車場といくつかの看板を通り過ぎると、軍の前線基地を再現した入口に辿り着く。正門向かって左側がチケット売り場になっており、コロナウイルスに関する注意事項、警察・救急などへの連絡先、公園内規則、入園費が掲示されている。入園費は、アゼルバイジャン人は2マナト(6歳以下は無料)、外国人は10マナトであり、ガイド付きは追加20マナト⁽³⁾である。チケットはチケット会社のWebサイトからも購入可能であるが、値段は変わらず入場制限もないため、現地で購入しても問題ないだろう。

戦利品公園の展示①正門付近

戦利品公園は、軍事車両・兵器の野外展示、アルメニア軍基地と塹壕の再現物、正門付近の3エリアに分かれている。入場者はまず正門付近の展示を見ることとなるだろう。

正門付近には、巨大なアゼルバイジャン国旗が掲げられており、その周囲にはアルメニア軍の車両から剥がしたナンバープレートを集めた展示パネルや、第2次紛争の戦史展示パネル、アルメニア軍が使用していた兵器やロシア軍から供給されたイスケンデルミサイルなどが収められたトレーラーが配置されている。特に目立つのは、左奥側にあるアルメニア軍の

⁽³⁾ 調査時期の2022年9月上旬頃は、1アゼルバイジャンマナト＝83円程度である。

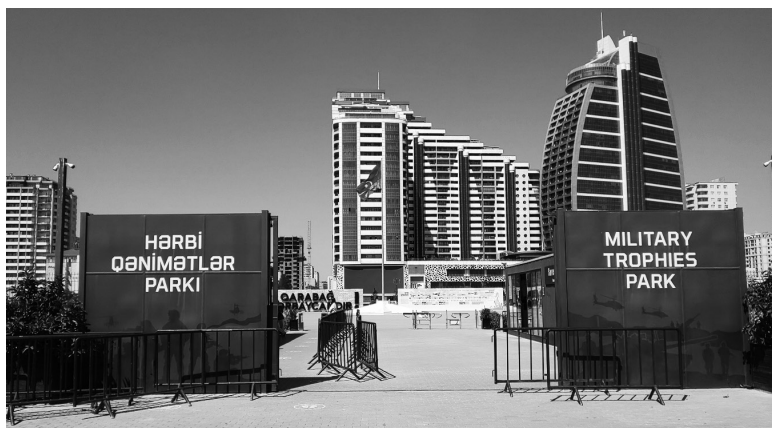


図1 戦利品公園正門

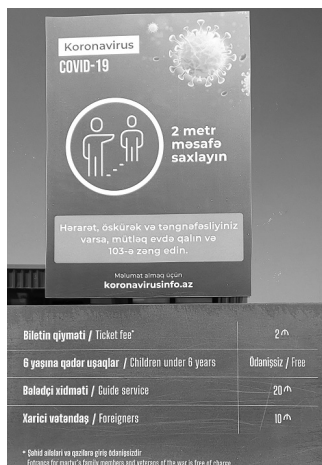


図2 チケット売り場のコロナウイルスの注意書き(上)と入場料揭示(下)



図3 戦利品公園園内図
左がアゼルバイジャン語 右が英語表記

車両から剥がしたナンバープレートを集めた展示パネルであろう。展示パネルには2000枚以上の鹵獲品のナンバープレートが並べられ、その上に「カラバグはアゼルバイジャンだ!」と大きく書かれている。開園式に参加したイルハム・アリエフ大統領は、第1次紛争後にアルメニアでアゼルバイジャンの自家用車のナンバープレートの鹵獲・展示があったと批判[AƏN 2021]していることから、意趣返し的な展示なのだろう。右奥側には第2次紛争の戦史の展示パネルが立てられ、今回の紛争をアゼルバイジャンの解放戦争、イルハム・アリエフ大統領を解放者と位置づけ、各地域での戦いの概要を説明している。その周辺には、アルメニア軍が使用した兵器(小火器、ミサイル、一般兵士の装備品)を収めたトレーラーが



図 4 戦利品公園正門付近展示

中央が国旗、中央左後ろがナンバープレート看板、中央右後ろが戦史看板
両脇には軍事品やミサイルが収められているトレーラー



図 5 アルメニア軍が使用したとされる短距離弾道ミサイルのイスケンデル-Mの展示

配置されている。トレーラーにはそれぞれの名称、歴史、スペックの説明とそれらをスマートフォンで見ることができる QR コード⁽⁴⁾が記されたプレートがアゼルバイジャン語・英語で設置されている。基本的には淡々と説明しているだけであるが、アゼルバイジャン内に落ちたミサイルの展示については、被害状況や対象法についてかなり饒舌に語られている。これは後述する野外展示のミサイル部品と併せて、如何にアルメニア軍が民間人を攻撃するような非道な行いをしたかという点を強調しているようであった。

(4) ただし全展示の QR コードはエラーで機能していなかった。



図 6 アルメニア軍の T-72 戦車
1970 年代に開発されたソ連軍主力戦車



図 7 アルメニア軍の BMP-2 歩兵戦闘車
1980 年代に開発されたソ連軍歩兵戦闘車

戦利品公園の展示②軍事車両、兵器等

公園の展示で広大な面積を占めるのは、アルメニア軍から鹵獲した軍事車両、兵器の野外展示である。主な展示を挙げると、戦車 (T-72)、装甲車 (BMP-1、BMP-2、MT-LB)、対戦車ミサイル発射機付き偵察戦闘車 (9P148)、地雷敷設機 (PMR-4)、レーダー (P-19)、トラック (GAZ、KamAZ、URAL、ZIL-131)、小型軍用車両 (UAZ)、飲食関係車両 (KP-130、SV-1200)、地対空ミサイル (9K33 Osa)、多連装ロケット砲 (BM-21、BM-30)、自走砲 (2S1 グヴォズジカ)、対空砲 (KS-19、M55、S-60、ZSU-23-4)、迫撃砲 (2B9)、大砲 (D-1、D-20、D-30、2A36) などである。ほとんどの兵器が旧ソ連⁽⁵⁾またはロシア連邦の兵器であり、アルメニアが軍事的にロシアに依存していることがうかがえよう。野外展示では正門付近の展示と同じ

⁽⁵⁾ 多くの兵器は 1960～1980 年代のものだが、D-1 (1943 年開発の榴弾砲)、KS-19 (1948 年開発の高射砲) など一部に 1940 年代のものも存在していた。



図8 アゼルバイジャン領内に落下したアルメニア軍のミサイルのエンジン部品

く、名称、歴史、スペック、QRコードが記載された展示パネルが立っており、入場者への説明に役立てられている。ただし、正門付近の展示と異なる点は、「操作可能」「破壊」といった展示物の状態も示されていることである。第2次紛争ではアゼルバイジャン軍のドローンがアルメニア軍のレーダー網を掻いぐり、軍事車両や兵器を破壊したことは広く知られているが、展示物の一部はそうしたドローン攻撃で破壊した兵器と思われる。このような旧ソ連・ロシアの兵器で固めたアルメニア軍兵器の破壊状況は、アゼルバイジャン軍の強さを誇示しているように見受けられた。

その他、野外展示で目を引くのは、ミサイルの部品が突き刺さった机である。説明書きによれば、アルメニア軍の多連装ロケット砲スメルチ(BM-30)によって発射されたミサイルの一部が村に落ち、民家の机に突き刺さったという刺々しい批判がなされている。どうやら、正門付近のミサイル展示と同じく、アルメニア軍による民間人への攻撃という戦争犯罪を如実に物語っているようである。第2次紛争では、アゼルバイジャンとアルメニアの両国が互いの非道や戦争犯罪を訴えることがしばしば見られたが、このような展示の存在もそうした行為の延長線上にあるものと言えるかもしれない。

戦利品公園の展示③アルメニア基地と塹壕

公園中心部を占めるのは、90年代の紛争以降に建設されたアルメニア軍基地と塹壕を合わせた防御陣の再現である。外から、対戦車用溝、対戦車地雷、竜の歯(対戦車障害物)、チェコの針鼠(対戦車障害物)、4本支柱の柵、低めの有刺鉄線、対人地雷、有刺鉄線、コンクリートフェンス、有刺鉄線とコンクリートフェンス付き塹壕、前線基地で構成されている。有刺鉄線とコンクリートフェンス付き塹壕と前線基地以外には、入場者が入ることはできず、外から説明書きとともに眺めることができる。第2次紛争で主戦場となったナゴルノ・カラバ



図9 アルメニア軍の防御線の再現
複数の対戦車障害物が設置されている

フ地域の南部には、このような防御陣が複数設置されており、如何に強固で防御陣の突破が困難であるかという説明がなされていた。一見アルメニア軍を称えているようにも見えるが、実際にはこれだけの防御陣を打ち破ったアゼルバイジャン軍を称賛し、アゼルバイジャン軍の防御陣突破という英雄的行為の追体験を可能にしているのだろう。

一般人が入場できる有刺鉄線とコンクリートフェンス付き塹壕では、タイヤで塹壕が補強され、さらに塹壕内にアルメニア軍が使用したと思われる軍物品（小火器、弾薬、ヘルメット、飯盒）、蛸壺豪、潜望鏡、通信機器などが設置されている。これにより、さながら第1次世界大戦のような塹壕戦を体験することができる。最深部にある前線基地は半地下にあり、武器庫、宿舍、食堂、食糧庫、指令室なども設置されている。ただし、アルメニア軍人の蠟人形とヘルメットの大半は既に撤去されていた。ただ、基地内部にはアルメニア及びナゴルノ・カラバフ共和国のプロバガンダと思わしき写真やポスターに加えて、第2次紛争以前のナゴルノ・カラバフ共和国の国旗や支配領域を明示する地図まで張られていた。アルメニア軍の陣地を再現するとはいえ、ナゴルノ・カラバフ共和国の存在自体を認めていないアゼルバイジャンがこのような展示を残すのはいささか奇妙にも思えた。

戦利品公園の展示④その他展示・施設

以上が主な公園の展示になるが、他にもいくつかの展示・施設が存在している。展示関連としては、公園の東端に紛争関係の動画を流すための軍用テント型の上映施設ビデオホールが設置されている⁽⁶⁾。展示そのものではないが、公園内のイスはアルメニア軍の弾薬箱で作られ、照明は砲弾から、ごみ箱は砲弾の発射装置の一部から作られており、公園内の全てのものがアルメニア軍から勝ち取ったことをアピールしているようであった。

⁽⁶⁾ ただし、筆者の訪問時には映像は流れておらず内容を確認できなかった。



図 10 アルメニア軍の塹壕
左側にアルメニア軍のヘルメットらしきものがある

非展示関連としては、公園内には飲食物を販売する売店と正門入り口付近に土産物屋がある。土産物屋では、ナゴルノ・カラバフ地方の名所や絨毯を模した像、地名や「カラバグはアゼルバイジャンだ!」という文言が書かれたシャツや帽子、弾薬・戦車・銃などを模したキーホルダーなどが売られている。しかし、在庫が積み重なっていることから見て、それほど売れていないようである。

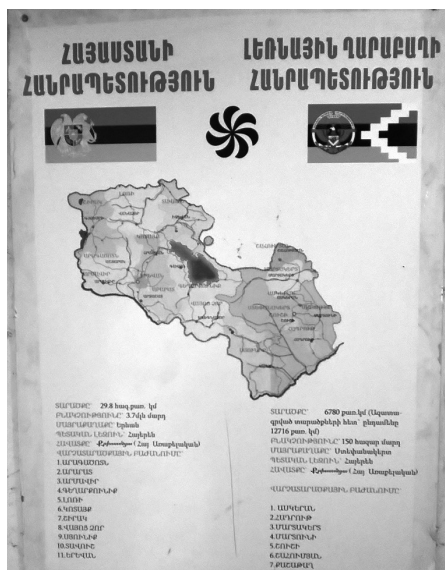


図 11 再現されたアルメニア軍
前線基地内の掲示物
アルメニアとナゴルノ・カラバフ共和国の国旗
および領土が記されている

戦利品公園の様子と意義

最後に公園の様子と意義について若干の考察をしてみたい。

まず、筆者が訪れた9月上旬の戦利品公園の様子だが、訪問客の数はさほど多くはなく、少数の入場者もアゼルバイジャン人の1家族を除けば、ロシア人・カザフ人など旧ソ連諸国の観光客ばかりであった。旧ソ連諸国の観光客は、学習目的というよりはT-72戦車などソ連時代以来の兵器に乗車する、あるいは子供たちが塹壕で第2次世界大戦のスターリングラード戦を模した遊びをするなど、レジャーランドのように扱っているのが目立った。学生の遠足による訪問が多いと聞いていたが、学校の長期休暇中であつたためか、アゼルバイジャン人学生の姿を見かけることはなかった。公



図 12 戦利品公園内のベンチ
基礎部分が弾薬箱になっている

園内のスタッフもスマートフォンを片手に遊んでいて、やや弛緩している様子であった。大統領令から愛国心や祖国防衛義務の精神を養う意義があるのではないかと考えていたが、訪れるアゼルバイジャン人自体が少ないためそのような役割を担っているようには見えなかった。

何人かのアゼルバイジャン人に戦利品公園について聞き取りした結果も、このことを裏付けるように思われる。例えば、ある大学教員は「公園は確かに紛争に勝った証だが、(公園には)もう普通のアゼルバイジャン人なんかいません、観光目的のロシア人ばかり」と述べ、ある官僚は「20～30年後には観光施設化を目指したいですね」と述べ、あるウラマーは「(公園は)よく知らないし、行く気もないけれど誇りに思う」と述べた。いずれの意見も戦勝の誇りなどを認めつつも、愛国心、祖国防衛、犠牲者の追悼・顕彰の意義⁽⁷⁾に高い評価を与えているわけではないことが明らかである。そうであるならば、戦利品公園はある程度の戦勝誇示と大統領への称揚を除けば、外国人を引き付けるための施設でしかないのかもしれない。公園内であるロシア人家族から聞こえた「ベトナムのクチ⁽⁸⁾のようだ。銃は撃てないけどね」という発言は言いえて妙である。観光客ばかりの戦利品公園を見ると、今後は学生と外国人向けのダークツーリズム的なもの、あるいはより商業化されたものとして整備されていくのだろうと感じるのであった。

なお、本稿は JSPS 科研費 JP22H00051 基盤研究 (A)「ハイブリッド戦争時代における新たな安全保障学の構築：中東ユーラシア地域の事例から」の助成によって実施した研究成果の一部である。

(7) そもそも紛争関係者の犠牲者追悼という意味ならば、バクー市内南西に、ソ連末期の民族運動から第1次ナゴルノ・カラバフ紛争までの犠牲者を葬る墓地である「殉教者の小路 (Şəhidlər Xiyabanı)」がある。

(8) おそらくベトナム南部のホーチミンの北西方面のクチにあり、ベトナム戦争時に南ベトナム解放戦線の拠点として使用されたクチトンネルを指していると思われる。

参考文献

(邦語)

国末憲人, 2023年1月28日, <https://twitter.com/KunisueNorito/status/1619292986642419715>, 閲覧日: 2023年4月25日。

(英語)

Avetisyan, Ani, 2021.10.15, “Azerbaijan removes mannequins and helmets from military trophy park,” *Open Caucasus Media*, URL: <https://oc-media.org/azerbaijan-removes-mannequins-and-helmets-from-military-trophy-park/>, 閲覧日: 2023年4月25日。

(アゼルバイジャン語)

AƏƏN: 2021.4.12, “Prezident İlham Əliyev Bakıda Hərbi Qənimətlər Parkının açılışında iştirak edib,” *Azərbaycan Respublikası Əmək və Əhalinin Sosial Müdafiəsi Nazirliyinin*, URL: https://www.sosial.gov.az/en/post_443930, 閲覧日: 2023年4月25日。

APRIS: 2020.12.3, “Bakı şəhərində Vətən müharibəsi memorial kompleksinin və Zəfər muzeyinin yaradılmasıhaqqında Azərbaycan Respublikası Prezidentinin Sərəncamı,” *Azərbaycan Prezidentinin Rəsmi Internet Səhifəsi*, URL: <https://president.az/az/articles/view/48457>, 閲覧日: 2023年4月25日。

(龍谷大学社会学部)